

慶應義塾大学体育研究所 設立50年記念シンポジウム

2011年12月10日(土)

慶應義塾大学日吉キャンパス スポーツ棟

プログラム

13:00~14:15

第1部「50年の歩み」

開会挨拶 植田 史生 慶應義塾大学体育研究所長

祝辞 清家 篤 慶應義塾長

体育研究所の50年 佐々木玲子 慶應義塾大学体育研究所教授

14:15~14:30

休憩

14:30~16:40

第2部「慶應義塾の体育・スポーツを問い直す」

司会 近藤 明彦 慶應義塾大学体育研究所教授

<シンポジスト>

「大学における競技スポーツ—NCAAの諸規定を参考に、そのあり方を考える」

加藤 大仁 慶應義塾大学体育研究所准教授

「スポーツにおける大学と地域の連携」

須田 芳正 慶應義塾大学体育研究所准教授

「大学体育教員の使命—カリキュラム・ポリシーとディプロマ・ポリシーとともに」

村山 光義 慶應義塾大学体育研究所准教授

指定発言者 長谷山 彰 慶應義塾常任理事

閉会挨拶 綿田 博人 慶應義塾大学体育研究所副所長

17:00~19:00

レセプション

会場 ファカルティラウンジ

問い合わせ先

慶應義塾大学体育研究所 事務室

Tel.045-566-1068 Fax.045-566-1089

E-mail: 50symposium@ml.keio.jp

http://www.hc.keio.ac.jp/ipe/

慶應義塾大学体育研究所

設立50年記念シンポジウム

2011 12/10 土

シンポジウム:13:00~16:40

レセプション:17:00~19:00

会場●慶應義塾大学日吉キャンパス スポーツ棟

〒223-8521 横浜市港北区日吉4-1-1

(レセプションはキャンパス内ファカルティラウンジにて行います)

第1部 50年の歩み

第2部 慶應義塾の体育・  
スポーツを問い直す



慶應義塾大学  
体育研究所

# 設立50年 記念シンポジウム

## 第1部

### 50年の歩み

開会挨拶

植田 史生

慶應義塾大学体育研究所長



祝 辞

清家 篤

慶應義塾長



## 体育研究所の50年

佐々木玲子

慶應義塾大学体育研究所教授



お茶の水女子大学文教育学部助手、慶應義塾大学体育研究所助手、専任講師、助教授を経て現職。  
学歴/お茶の水女子大学文教育学部卒業。お茶の水女子大学大学院人文科学研究科修士課程修了。学術博士。

保健体育科目が大学における正課の授業として定められて10年余り後、1961年に慶應義塾大学体育研究所が設立され、今年で50年が経った。体育・スポーツを通じた塾生の教育を活動の中心として歩んできた我々の50年を、ここで年代を追って概観する。50年の中では、世の中における体育・スポーツ観、あるいは健康観も大きく変化してきた。また、大学の保健体育科目として大きな変換期を経験したのもこの間の出来事である。毎年何千人もの塾生と共に動き、共に感じ、共に考えながら接してきたこの道のりを振り返りたい。また、近年では、塾内外を問わず広くスポーツの振興、スポーツを通じた様々な交流にも力を注いできた。これまでの諸活動を振り返りつつ今後の姿を眺望できればと思う。

## 第2部

# 慶應義塾の体育・スポーツを問い直す

●シンポジスト

## 大学における競技スポーツ

—NCAAの諸規定を参考に、そのあり方を考える

加藤 大仁

慶應義塾大学体育研究所准教授



慶應義塾大学体育研究所助手、専任講師、助教授を経て現職。1995年から2年間、サンノゼ州立大学にて訪問研究員/訪問講師として活動する傍ら、男子バスケットボール部にコーチングの研究を積む。この間、チームスタッフとしてNCAAトーナメントにも帯同。  
学歴/慶應義塾大学法学部政治学科卒業。慶應義塾大学大学院法学研究科政治学専攻修士課程修了(法学修士)。慶應義塾大学大学院法学研究科政治学専攻後期博士課程満期退学

今や高校卒業者の半数以上が大学に進学するようになった。その一方で、少子化の影響により大学間の新入生獲得競争はますます激化している。こうした状況の下、学校名を広めるため、あるいは地域社会との連携を図るための手段として、スポーツを積極的に活用する意図を明確にしている大学も少なくない。しかし学校経営優先の行き過ぎたスポーツ至上主義は、様々な弊害をもたらしかねない。過去の歴史を振り返ると、大学側が教育機関としての立場から学生スポーツに関する意見を積極的に表明してきたとは言い難い。また、大学レベルには、各種目を横断的に統括するような団体が存在しなかったため、大学側の意向を反映させることは極めて困難であったことも事実である。このような状況が続くと、競争の公平性が確保されない、あるいは学業無視といった状況が深刻化する可能性がある。そこで今回はアメリカの大学スポーツを統括するNCAAの歴史や諸規定を紹介し、我が国における大学スポーツのあり方に関する議論の端緒にしたいと考えている。

## スポーツにおける大学と地域の連携

須田 芳正

慶應義塾大学体育研究所准教授



浦和レッズ引退後、慶應義塾大学体育研究所助手、専任講師を経て現職。2007年から2年間、オランダにコーチ留学しKNVB2級ライセンスを取得。現在、慶應義塾大学体育会サッカー部監督。  
学歴/慶應義塾大学法学部政治学科卒業。順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科修士課程修了。弘前大学大学院医学研究科在籍

東日本大震災という未曾有の危機は、生活における地域コミュニティの重要性を改めて認識する機会となっている。都市化により地域内の結びつきが弱まる中で、世代や職業等の垣根を越え、多くの人々が集まり楽しむことができるスポーツは、コミュニティを生み、育てる一つの原動力となりうる。日本のスポーツ政策は、西欧のスポーツクラブを範とした総合型スポーツクラブの発展を模索しているが、私は、人的、物理的、知的なりソースの集積地である大学こそが、日本のスポーツを真に地域に根ざし、人々のコミュニティを生み出すために貢献すべきだと考える。そのために、大学の体育施設を地域に積極的に開放し、教員及び学生がスポーツを通して地域の現実目に向け、地域の方々との半学半教を行う新たな教育の場である大学発の地域スポーツクラブを提案する。

## 大学体育教員の使命

—カリキュラム・ポリシーとディプロマ・ポリシーとともに

村山 光義

慶應義塾大学体育研究所准教授



慶應義塾大学体育研究所助手、専任講師、助教授を経て現職。  
学歴/順天堂大学体育学部体育学科卒業。順天堂大学大学院体育学研究科修士課程修了。順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科後期博士課程修了(スポーツ健康科学博士)

近年、スポーツ基本法の成立、スポーツ立国戦略の発表等、スポーツの社会的役割の重要性が国民に向け投げかけられている。しかし、競技力の向上や地域スポーツクラブの発展に力を注ぐことで、スポーツをすることが権利であり国を活性化する重要な活動であると、国民は認識できるであろうか?私は、大学体育こそが、そうしたスポーツの価値や重要性を伝え、スポーツ立国を支える学生を育てることに貢献するべきであると考えている。従って、大学体育の教育は今こそ人間教育としての普遍性を再確認し、心身ともに活力に溢れ、他者との交流を深める行動力を持った人材育成に貢献することを目指すべきである。そのために、我々は体育を再び基礎的科目として学生にとって必須のものにしていく努力をすべきである。そして、大学の教育ポリシーにそったカリキュラムの内容を一層深く検討していく必要があると考える。

指定発言者 長谷山 彰

慶應義塾常任理事

1952年生まれ。1975年慶應義塾大学法学部卒業。1979年文学部卒業。1981年大学院文学研究科修士課程修了。1984年同博士課程単位取得退学。1987年駿河台大学法学部専任講師。その後、同助教授、同教授を経て1997年慶應義塾大学文学部教授。1998年から1999年まで通信教育部学習指導副主任。1999年から2001年まで学生総合センター副部長、2001年から2005年まで学生総合センター長兼学生部長。2005年から2007年まで大学院文学研究科委員長補佐。2007年から2009年まで文学部長、大学附属研究所斯道文庫長。2009年より慶應義塾常任理事。現在に至る。



司会

近藤 明彦

慶應義塾大学体育研究所教授



慶應義塾大学体育研究所助手、専任講師、助教授を経て現職。教養教育センター副所長、体育研究所副所長を歴任  
学歴/日本大学文理学部体育学科卒業。日本大学大学院文学研究科教育学専攻博士前期課程修了(文学修士)

閉会挨拶

綿田 博人

慶應義塾大学体育研究所副所長

